

# 独自の食事箋システム導入

## 電カル連動で入力負担大幅減

釧路孝仁会記念

釧路市の釧路孝仁会記念病院（齋藤孝次理事長、稲垣徹院長・199床）は、情報管理部が中心となって、独自の食事箋アータ連動システムを構築。これまで病棟と厨房で異なっていたデータ入力を統一したことで、入力ミスが大幅に減ったほか、スタッフの業務負担軽減につながっている。

同病院では、給食会社カルテに食事箋を入力。電子カルテネットワークし、外部とつながる栄養管理システムネットワークに食事箋を参考にしたワークが併存している。食事内容を入力、それを給食会社が確認して、食

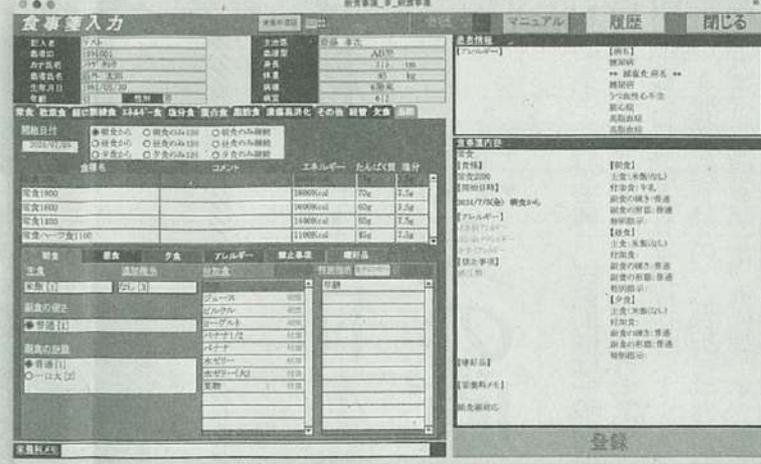
事を用意するという流れ。2つのネットワークが併存することで、厨房は食事箋データを改めて栄養管理システムに入力する手間が発生しているほか、電子カルテはフリーコメント入力のため、おにぎり1つでも、「オニギリ」「お握り」など書き方が複数存在。大盛り、早膳、遅食といった食事内容も入力するスタッフによって表記が異なっていた。さらに食事提供の締め切り後に、緊急入院した患者がいた場合、病棟が厨房に食事提供可能か電話で確認しなければならぬなど、スタッフの負担が少なくなかった。

入力画面を一新し、フリーコメントを廃止して、基本的にマウスで選択してチェックするだけで必要な情報を入力できるようにした。食事内容の詳細についてはマスター化し、一目で内容が分かるよう工夫。食事提供の締め切り時刻も表示し、電話で確認する必要がなくなった。入力・確認画面は、常食、塩分コントロール食、エネルギーコントロール食など食糧ごとに画面を色分け

し、分かりやすくした。入力後の登録ボタンも大きく表示し、押し忘れを防いでいる。こうした取り組みの結果、入力ミスが導入前1カ月当たり10件だったのが、0.5件に減少。入力等の作業にかかる時間は毎食2時間から30分へと大幅に業務負担が減少した。

システムを開発した、情報管理部の横山光氏は、「操作に慣れるまで時間を要したケースもあるが、大きなトラブルもなく、効果を出している。現場からの細かな要望に対応して、逐次、改善を図っていきたい」と話す。同様のシステムは、同じ法人の釧路孝仁会（原ピリテーション病院（原田英之院長・135床）でも採用している。釧路孝仁会記念病院からの患者受け入れが多く、患者の食事箋作成を容易にすることが主な目的。導入から間もないこともあり、業務改善効果などは、これから明らかになるという。

こうした課題の解決へ、情報管理部では既存のファイル管理アプリケーションを活用して、2つのネットワークに連携



2024年(令和6年)9月23日(月)  
北海道医療新聞 3面